

野口の廃寺 蓮覚寺

常陸大宮市域には、かつて多くの寺院がありました。江戸時代前期の寛文年間(1661～1673)の時点で、常陸大宮市域には少なくとも200を超える寺院が存在したことがわかっています。しかし、徳川光圀や徳川斉昭が実施した寺社改革や、明治初期の廃仏毀釈によって、寺院の多くがその姿を失いました。現在は、地名やわずかな史料、伝承からその痕跡を伺うことができますが、その実態については不明なことが多いです。今回は、その中から、野口地区にかつて存在した蓮覚寺について紹介していきます。

◇蓮覚寺の創立と歴史

金剛山密蔵院蓮覚寺は、野口字内原(『新編常陸国誌』では字内古屋)に所在した真言宗の寺院です。江戸末期に作成された村絵図によると、時雍館(絵図では「学館」)の敷地内に「元蓮覚寺」と記されていることから、旧野口小学校(現在は教育支援センター)の場所に寺院があったと推定できます。その由緒は古く、大同元年(806)に讃岐国の僧・玄海が佐伯神社の別当として蓮覚寺を建立したと伝わっており、これは由緒を持つ常陸大宮市内の寺院(廃寺含む)では最も古い部類となります。蓮覚寺が初めて記録に登場するのは文明6年(1474)のことで、鹿島神社(那賀地区)に奉納された棟札の裏に「別当野口村 蓮覚寺」と記されています。鹿島神社に棟札を奉納した大旦那「源義照」は佐竹氏一族・長倉氏に推定される人物であり、蓮覚寺はこの頃すでに佐竹氏の影響下に置かれていたものと考えられます。同寺の周辺には妙浄坊・法浄坊・蓮浄坊・慶蓮寺など多くの門徒や末寺が存在しており、佐竹氏による庇護の下で繁栄していた様子がうかがえます。



画像1 蓮覚寺跡地(野口地区)



画像2 江戸時代の蓮覚寺跡(当館蔵)

ところが、慶長7年(1602)に火災で建物や書類等が全焼し、蓮覚寺は一転して存続の危機を迎えます。佐伯神社の由緒書によると、火災の後、岩崎村(現在の常陸大宮市岩崎)徳乗院の鏡舞上人が徳川家康に寺院存続を直訴し、翌年の検地で寺領を与えられたことが記されています。しかし、徳川光圀による寺社改革で破却を命じられ、元禄11年(1698)に廃寺となりました。

◇蓮覚寺を訪れた京都の僧

蓮覚寺が有力な寺院であったと推測できる史料に、「堯雅僧正関東下向記録」(醍醐寺三寶院蔵)と「堯雅僧正関東下向印可授与記」(醍醐寺史料)が存在します。これは、醍醐寺の子院である無量寿院(京都府京都市)の僧・堯雅が東国の諸寺院を巡回して付法(弟子に教法を授けること)を行った記録であり、元龜2年(1571)10月8日に蓮覚寺を訪れたことが記されています。堯雅はおおよそ数週間、蓮覚寺を拠点に付法を行ったと考えられ、同寺の僧だけでなく、妙浄坊・法浄坊・蓮浄坊といった蓮覚寺門徒や、長倉・部垂など周辺地域の真言宗門徒にも印可を授けました。真言宗醍醐派総本山に属する僧が東国における滞在先の1つとして蓮覚寺を選択したことに、蓮覚寺の隆盛をうかがうことができます。

【参考文献】

- ・御前山村郷土誌編纂委員会編『御前山村郷土誌』平成2年
- ・福島県編『福島県史 第7巻 資料編2 古代・中世資料』昭和41年

(高橋拓也)

■問い合わせ■

文書館 ☎52-0571